

Zoom Up

人

多くの人との出会いに恵まれ、
助けてもらったことの恩返しが
少しでもできればという気持ちです



瀬川 愛子 さん

●せがわ・あいこ 昭和30年黒沢尻北高校を卒業した後、放送関係の仕事を経て、旧玉山村で、保育士として平成9年3月まで勤務。仕事のかたわら、平成7年に県立盛岡短期大学を卒業。日本初の女性新聞記者にして教育家の羽仁もと子を尊敬する。休日は、ドライブや旅行などをして過ごす。「まず行動」をモットーとする71歳。J P I C読書アドバイザークラブ会員。北上市出身。夫と息子夫婦、孫3人の7人家族。大更在住。



録

音機材を前に深呼吸、心を落ち着けてマイクに向き合い、静かな、どこまでも優しい声が紡ぎ出される。八幡平市朗読奉仕ほおずきの会の会長として、瀬川さんは今日も「声の広報」の録音を行っている。

保育士として長年勤めた経験を活かし、退職後は読み聞かせボランティアとして活動しようと思っていた瀬川さん。「西根地区に住んでいたものの、職場が玉山村だったこともあって、地元にそうした活動をしている団体の存在を知らなかったんです」と当時を振り返る。旧西根町の生涯学習団体の活動発表会の中で、ほおずきの会が朗読と声の広報活動を行っていることを知り、瀬川さんは即座に入会を決定した。

朗読や読み聞かせは「読んであげる」ものではなく、一緒に読んで、一緒に楽しむものなのだという。人とふれあい、喜んでもらえること、うれしさが、活動の原動力だ。「これまで多くの人からもらった温かさ、優しさを子どもたちに少しでも伝えることができれば」。そう言っている笑顔には、慈愛が満ちあふれている。

声の広報を収録する際には、一字一句正確に朗読することに加えて、写真の表現には特に気を配る。聴く人の心に、写真の情景が浮かぶように工夫しているのだという。「何年やつても百パーセントの満足はありませんね」。利用者への思いやりが自然に表れる。「もっと多くの人に活動を知ってもらって、仲間を増やしたいですね」。現在は女性が主要なメンバーだが、今後は男性や小中学生なども加えて、活動の幅を広げることも考える。市立図書館で毎年行っているほおずきの会の朗読発表会に感動して入会する人もあり、緩やかに広がりを見せる。朗読が好きな人、興味がある人たちが、一歩を踏み出しやすい環境づくりも目指しているのだ。朗読を愛する人の輪は、今後も確かなものとして広がり続けるだろう。